

「トコトンヤレぶし」について

「早稲田大学図書館月報」第61号の八四八頁に演歌（流行歌）の録音テープの目録が載っている。これは、昭和32年12月21、22日の両日にわたってだったか、私と塩田英五郎氏が、神長瞭月、東富士雄、宮島郁峯、田浦虎一の四人の演歌師の方々に、早稲田大学図書館の視聴覚室に来ていただき録音したものである。

当時の視聴覚室は、いまの文献複写係撮影室（余館一階）がそれで、その中に防音室を造り、その中で録音したものである。担当者遠藤雅司君、小岩井衆君である。狭い中での録音であった。

そこでまず最初は、神長氏のものから始めよう。一番目の「お江戸日本橋」はこの「早稲田大学図書館紀要」第4号の「五」三頁に詳しく書いたのをそれを見ていただくことにして、次の「宮さん」（トコトンヤレぶし）について書き始めることにする。

この歌詞は、『音楽五十年史』（堀内教三著、鱗書房刊、昭和17.12.10

田 口 親

発行、チニ表五）によると、品川弥二郎となっており、作曲は、大村益二郎等が相談して作ったと伝えられている（一説には、京都祇園新地の島村屋の抱え芸者中西君雄となっている）が、本当のところはわからない。ただ、大村とすれば、オランダ鼓笛隊の演奏していた曲と日本の旧来の歌謡の曲とを折衷したものを作ることのできる人と考えられる。

品川弥二郎は諱を日孜、字を思父と称して、号を扇洲、思甫、若談楼、または念仏庵主といった。天保一四年（一八四三）九月二十九日、長門国萩の東郊椿郷松本村字川端（現在萩市椿東区船津）に生まれ、父は弥市右衛門、母は満津（松子）といった。安政四年（一八五三）、十五歳で松下村塾に学び、吉田松陰の教えを受けた。幕末維新の際には御旗隊に属し、また薩長同盟で活躍した。

王政復古の大号令が慶応三年（一八六七）一二月九日に下ると、摂政、関白、征夷大將軍等の従来の官制を一切廃して、新たに總裁、議定、参予の三職が配置された。總裁に有栖川熾仁親王、議定に仁和宮嘉彰親王、山階宮晃親王、中山前大納言忠能、正

親町三条前大納言実愛、中御門中納言経之、尾張藩主徳川慶勝、越前藩主松平慶水（春嶽）、芸州藩主浅野長興、土州藩主山内豊信（容堂）、薩摩藩主島津茂久、参与には大原重徳、万里小路博房、長谷信篤、岩倉具視、橋本実梁、その他に以上五藩の重臣が三名ずつ選ばれ、それぞれ任命された。

弥二郎は、奥羽鎮撫総督参謀となり、有栖川宮にいろいろと意見を申し上げているが、それらの中には錦の御旗を作ることもあり、またそれと同時に、庶民一人々に官軍の意味を説明しているより、歌謡を紙に刷り、官軍の進み行く沿道でまき散らしながらゆくことが良いのではないか、などということもあった。そこで「宮さん宮さん」の歌詞が出現したのである。弥二郎は、後、枢密顧問官となり明治三年（一九〇〇）二月二十六日死去した。五十八歳であった。法名は至誠院釈一貫日孜居士といい、京都靈山墓地に埋葬されている。

明治元年（一八六九）正月三日には鳥羽・伏見の戦が始まるのである。徳川慶喜は、部下の強い願いに擁立されて京都に入る。こととなり、幕府の歩兵並びに会津、桑名、姫路、高松、松山、大垣、浜田、忍等の親藩譜代の兵を出発せしめた。会津、桑名の二藩の歩兵と幕府軍の歩兵が先駆として京都に進撃した。また別に滝川播磨をして、薩摩討伐の表を持たせて京都進撃の口実とした。諸兵は元日より次々に大坂を出発して、守口、牧方、淀を経て、鳥羽・伏見の両街道を進んで、三日には薩摩・

長州の各兵が陣を張っていた鳥羽・伏見に到着して相対峙した。

戦は三日午後五時頃、鳥羽に陣を守っていた薩摩軍の発砲に始まって、つづいて伏見の長州軍が鳥羽の砲声を聞いて攻撃を開始した。薩・長の軍は少ない兵力であったが善く戦って、夜を徹して進み、四日の晩には幕府軍の攻撃を破った。一方、三日夜には宮中において議定、参与等に総参内を命じて会議が開かれた。そして議定嘉彰親王に軍事総裁を兼ねしめ、参与東久世少将、鳥丸侍従を軍事参謀とした。これと同時に、嘉彰親王を征討大將軍とすることにして錦旗節刀を授け、参与四条隆調、参与助役五条為栄を錦旗奉行に命じた。そして官軍、東軍の区別が一般の人達にも明らかになっていった。そして四日の朝から、征討大將軍の宮が錦旗を掲げて戦場に出陣してゆくことになった。

この錦旗こそ品川が命ぜられて作ったものである。そして「宮さん宮さん」を歌いつつ、官軍は江戸にむけて進撃していったのである。この歌の史実について、『品川弥二郎伝』（奥谷松治著・高陽書院刊・昭和15・2・10発行、頁七七、ヌベ三七）に、田中常太郎氏が父母から聞いた談話が載せられている。次にあげてみる。

「当時京都市中の有力な書店は、御所、薩摩、長州、会津、桑名等、諸藩の出入先がそれぞれ決つて居り、幕府末の頃になると出入先の関係により勤皇派と幕府派に二分されてゐた。四条通り御旗町に田中屋治兵衛（田中常太郎

氏の父でこの屋の主人」といふ書肆があり、東洞院二条上ルに支店を置いて相当盛大に営業してゐた。この書店の出入先は禁裡御用、西園寺公、長州藩、薩州藩等であつた。品川が薩摩屋敷に潜伏中、田中屋は商売のため藩邸内に入出し、品川の書面を受け取つて各方面に渡し外部との連絡を図つた。又その当時山口に大内版の論語の版元があり、長州から上京する使が版元の店員に化け、論語を荷物として田中屋に着き、田中屋から薩摩屋敷に使を出して品川と連絡を図つたこともあつた。田中屋の本店は、出入が表と横の両方にあり、密かに出入するのが便利であつたので、品川等が暮夜ひそかにこの店の二階に集つて密議をしたことも屢々であつたと云ふ。

或る日のこと品川がこの店に来て、主人にトコトンヤレ節の原稿を示し、明日迄に何百部かを印刷することを依頼した。主人は何人かの職人に外出を禁じて二階に籠詰にし、徹夜して版木を彫刻し又刷り、約束通りの時間までにそれを作り上げた。品川はそれを京都市内の町の辻で読売りに売らせたため、間もなくトコトンヤレ節が一般に流行する様になつた。尚品川は弁を使ふことが非常に上手であつた。」

なお、早稲田大学図書館には品川弥二郎の伝記が二冊入つてゐる。その一つは、『品川子爵伝』村田峰二郎著、大日本圖書株式会社刊、明治43・4・28発行、ヌバ三〇。もう一つは、『品川子爵追悼録』(織田完

之参関、阿武信一纂輯、警眼社刊、明治33・6・6発行、ヌバ四九)である。

さて歌詞のことについて、ちょっと書いてみることにしよう。早稲田大学図書館の特別書庫に所蔵されているものに、『都風流トコトンヤレふし』(華特・ヘギラシの墨一色刷一枚ものがある(同じものの復刻が、ヘギラシに入っている)。また早稲田大学演劇博物館所蔵(安田文庫)の『都風流トコトンヤレふし』の色刷一枚ものがある。この両者は歌詞に少々異なるところがあるので、次に対比してみたいと思う。前者を(A)とし、後者を(B)とする。

- ①(A) 一天万乗のミかどに手向ひするやつを
(B) 一てん万乗のミかどに手向ひするやつを

トコトンヤレトコトンヤレナ(以下略)

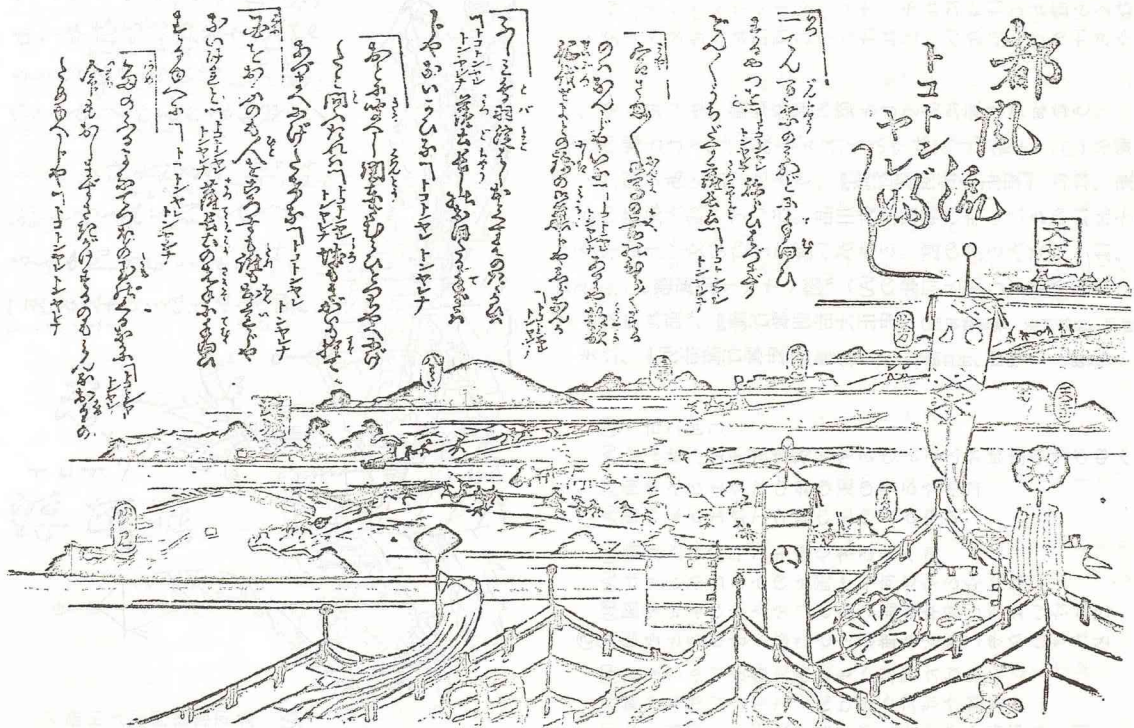
- (A) ねらひはづさずどん／＼うちだす薩長士
(B) 右に同じ

トコトンヤレトコトンヤレナ(以下略)

- ②(A) 宮さま／＼御馬の前のびら／＼するのへなんじやいな
(B) 宮さま／＼御馬の前のひら／＼するのへなんじやいな
(A) ありや朝敵征伐せよとの錦の御はたじやしらんか
(B) ありや朝敵征伐せよとの錦の御旗じやしらんか

- ③(A) ふしミ鳥羽淀はし本くずハのたゝかひハ
(B) ふしミ鳥羽淀はし本くすはのたかひハ
(A) 薩土長しのおはたる手ぎハじやないかひナ
(B) 右に同じ

- ④(A) おとに聞へし関東士どつちやへにげたと問ふたれば
(B) 右に同じ



都風流

トコトシ



一夫万妾のふかきふかき
 まるや川と「トコトシヤレ」
 移りゆく都風流
 うらやまは「トコトシヤレ」
 宮中へくひさのふかき
 ちのふかき「トコトシヤレ」
 あやや都風流「トコトシヤレ」
 うらやまは「トコトシヤレ」



- (B) おとに聞へし関東ざむらひとつちやへにげたと問ふたれハ
 (A) 城もきがいのもすてゝあづまへにげたげな
 (B) 城もきがいのも捨てあづまへにげたげな
 ⑤ (A) 国をとるのも人をころすも誰も本意じやないけれど
 (B) 国をおふのも人をころすも誰も本意じやないけれど
 (A) わしらがところのお国へ手向ひするゆへに
 (B) 薩長土の先手に手向ひするゆへに
 ⑥ (A) 雨のふるよなてつほの玉のくる中に
 (B) 雨のふるよなてつほの玉のくるなかに
 (A) 命もおしまずさがけするのもしんなお主のためゆへじや
 (B) 右に同じ

また、『明治流行歌史』(藤沢衛彦著、春陽堂刊、昭和4・1・28発行、頁一五)「とことんやれ節」、「流行歌明治大正史」(添田知道著、春秋社刊、昭和8・11・20発行、頁五十六)「都風流トシヤレ節」(A)の歌詞と同じ)等を見ても、いろいろと文字の上や文句の上で違いがある。私の見るかぎりでは、前に上げた二つの系統が残っている。品川弥二郎等の作ったものはおそらく初めの一・二節であったであろう。『流行歌明治大正史』には、東京に入ってから歌として、「はやりうたとんやれぶし」(頁七二〇)が載っているの、少々長い、演歌発展の姿として次に示しておこう。

・文久あをせんお江戸じやよけれど、いなかへでかけちやとほらない
 トコトシヤレトシヤレナ それにつけても道らくむすこの、
 小せんのゆくへがしれませぬ トコトシヤレトシヤレナ

つゝとて相違なくさう
のちかひは「トコトヤレトヤレナ
薩土長」のおゆるさふとい
へやまいこういふ「トコトヤレ
トヤレ

あまのこへ 園来士とちやへ

あひと 同ふにぞ トコトニヤ
トニヤナ

博もさつゝいもさるあふ

ト
ヤ
レ
ナ

玉をとりぬる人もあらずと

まぐろやふけと
トコトニヤ
トニヤレナ
ていふ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

シヤレナ

るのふつふつと水の泡

人言もあらずとてけ
トシヤレエ

そのめんかあとの

とめあへにやー
トニヤレナ



うへのムいくさのはなしをきけば、てつばふぼん／＼ひろ小路
トコトンヤレトンヤレナ　びつくり下谷でみなてうにんが、あさ
くさしてぞにげて行く　トコトンヤレトンヤレナ
・やなかに三さき前後があとさき、せんぢんおさきがこふめうで
トコトンヤレトンヤレナ　ちごそはやりさき女郎しゆは口さき、
むましく客をのせかける　トコトンヤレトンヤレナ

いくさのないとこにげてゆくなら、天へのぼるかぢにむぐれ
コトナレトコナレナ それがいやならどこへもゆかず、やつ

ぱりお江戸にいるがよい
トコトンヤレトンヤレナ

・いくささい中、おならがぷい／＼てつぽのおとかとまちがいて
トコトンヤレトンヤレナ　てきもおそれてはなをばつまんでくさ

い事じやとにげてゆく トコトシヤレトシヤレナ

人にすかれた文久せんも、今じやせけんできらはれる トコトン

で人がすく トコトシヤレトシヤレナ

・あいづに下向のそのせんぢんは、長しう彦根に尾ハリさま トコ

トイヤレトニヤレナ　ナ少のいきおいたんとおりきて　奈の御も
んのはたをたて　トコトニヤレトニヤレナ

・人づは大がきいせいとはとふぐ、いつもかちますあき黒田 トコ

トシヤレトシヤレナ　まつは片きりこう名は市はし
かたにきん
ぎれ相じるし　トコトシヤレトシヤレナ

・ひごの熊本九よしの星は、細川さまのさきそなへトコトンヤレ

トシヤレナ　くつはの御もんでりんくひびくはおとにきこへし
さつまさま　トコトシヤレトシヤレナ

・なゝ松平のその名もたかき、藤井にまつ井に大給さま トコトン

ヤレトシヤレナ
世良田長沢はなしは本せう丹波の守が戸田さま

「トコトンヤレぶし」について

で トコトンヤレトンヤレナ

・いくさはぶん取城をばのつとり、こうめうてがらでくび
をとり トコトンヤレトンヤレナ いんしうとつとり命
はやりとり、いつもいくさはかちをとり トコトンヤレ
トンヤレナ

・官軍総ぜい百まんよきの、ぐんぜいそろへていさましや
トコトンヤレトンヤレナ おふしうおげこふみなてうれ
んで、大づゝ小づゝで人のやま トコトンヤレトンヤレ
ナ

・ゑちぜんけでもしやつきり立花、いせいはよし田でいづ
みのかみ トコトンヤレトンヤレナ せんぜうにむかへ
ばこう名かず、としもいかさで酒井さま トコトン
ヤレトンヤレナ

・一にいけだがびぜんのたいよ、二ばんにくりこむあへさ
まよ トコトンヤレトンヤレナ 中のそなへが大むらさ
まよ、ごづめはかゞさまきしうさま トコトンヤレト
ンヤレナ

・おふ州せんだい国はこふ大、ぜん代みもんの大いくさ
トコトンヤレトンヤレナ さきはあいづでせんぜうは白
川、鉄ばはぼんぼんうつのみや トコトンヤレトンヤレ
ナ

・信州にまつしろゑちごで長岡、奥州でたなぐら太いくさ
トコトンヤレトンヤレナ ではで庄内もかみ山がた、よ
ね沢なんぶにつがるさま トコトンヤレトンヤレナ

・さゝりんどうが石川さまよ、○はかとふのもん所
トコトンヤレトンヤレナ ふじは内藤でなべしまさまが、
はなれまいとのだきめうが トコトンヤレトンヤレナ

・いくさはしづまり代はたい平で、諸けの軍ぜいは御かい
ぢん トコトンヤレトンヤレナ てうかよろこぶ諸しき
もさがれば、お江戸はどん／＼はんぜうする トコトン
ヤレトンヤレナ

・江戸でいちむらしかのしようさで、たのすけだつそう
の大がんそ トコトンヤレトンヤレナ めのちすてるも
おしうのためよ、おくれをとるのはよくのため トコト
ンヤレトンヤレナ

・ぎようとくふなばしいちかわかけて、姉さんまたぐらね
こざねか トコトンヤレトンヤレナ お米はたかいにお
わしのたかいで、くらしいのたかいはちよくしさま トコ
トンヤレトンヤレナ

こんな具合で、歌詞はどんどん増えてゆく。そして次のよう
なもので出てくる。

・姉さん／＼お前の頭に、ぐる／＼巻いたは何んじやいな
トコトンヤレトンヤレナ これは流行の束髪、いぎりす
結びを知らないか トコトンヤレトンヤレナ

そして『流行歌明治大正史』（頁三三九、四〇）によると、「新ト
ンヤレ節」（添田啞蟬坊作）が出てくる。

・皆さん／＼エンマさんの前に ピョコ／＼お辞儀するア
リヤ何ちや トコトンヤレトンヤレナ あれは米買つて
船買つて株買つて 儲けて死んだ亡者と知らないか ト
コトンヤレトンヤレナ

・皆さん／＼停留所々々々に うよ／＼してるものアリヤ
何ぢや トコトンヤレトンヤレナ あれはボロ電車に乗
る気で待つてゐる 気長な人間と知らないか トコトン
ヤレトンヤレナ

・皆さん／＼おかしな女どもが お花を売つてるアリヤ何
ぢや トコトンヤレトンヤレナ あれは貴婦人、自分の
金を出さずに 慈善をするといふのぢや知らないか ト
コトンヤレトンヤレナ

・皆さん／＼東京の街歩いて 一番糞にさはるものアリヤ
何ぢや トコトンヤレトンヤレナ あれは飛んで行く自
動車がハネ飛ばす どろ／＼路のどろだと知らないか
トコトンヤレトンヤレナ

こんな具合に、時代の流れのなかにいて、庶民の感じたものが
次々に歌にされて唱われていったのである。

第二節目の「宮さま」とは、有栖川宮熾仁親王殿下のことと
ある。熾仁は初め^{よしのぎ}敏宮と称せられて、有栖川宮第八代^{なほひと}熾仁親王
の第一王子で、嫡母は御息所広子、左大臣二条斉信の第五女、
生母は家女房佐伯氏、名は祐子、京都若宮八幡宮神主丹波守祐
条の第一女である。親王は天保六年（一八三三）二月一九日の誕生
である。慶応三年（一八六七）の頃は三十三歳の青年であったこと
になる。明治二年（一八六九）一月一日午後三時薨去（公妻の薨
去は二十四日）、六十一歳であった。当図書館に『熾仁親王行実』
上下巻（高松宮蔵版、昭和4・8・31発行、スニ五〇（一））とか『熾仁親王
日記』（高松宮蔵版、昭和11・7・15発行、スニ五三（一））等がある。

「トコトンヤレぶし」について

錦の御旗とは、日月を金銀で刺繍し、または画いた赤地の錦
旗で、鎌倉時代頃から朝敵征伐に官軍のしるしとして用いたも
のである。この史実は『太平記』の五の巻の「大塔宮熊野落の
事」の条に「（上略）只、彼れが申請くる旨に任せて、御旗を
被下候へかしと申しければ、宮、げにもと思召して、日月を、
金銀にて打ち着けたる錦の御旗を、芋瀬の庄司に被下ける（下
略）」とある。『太平記』は、花園天皇の文保二年（三三〇）より
後村上天皇の正平二二年（三三七）までの約五十年間の戦乱の記
録である。撰者は詳かではないが、小島法師円寂と伝えられて
いる。このように歌詞に類縁するところを説明をしてゆくと、
無限にいろいろな事柄にわたることになり、人間の作り出す社
会の動きのすべてに関連してくるのである。

なお、ここでちょっと触れなければと思うことは、第四節目
の「城もきがいのすてて……」のところであるが、「きがいの」
というカナを、『斬』（網淵謙策著、文芸春秋刊、昭和50・11・25発行、「文春
文庫」頁二二）および『日本をダメにした明治維新の偉人た
ち』早乙女貢著（山手書房刊、昭和53・12・5発行、頁二七）には、「機
械」と漢字当て、これは、大砲・鉄砲などのことであると書い
てある。「機械」を「きがいの」とに違って当時の人は呼んだの
であらうか。しかし、「城も気概も捨てて」と読む仁もいる。

この曲の作曲者と伝えられている大村益次郎は、文政七年
（一八二四）三月一〇日、周防国吉敷郡銚司村字大村（一説、同郡
秋穂村字天田）で生まれた。初め村田亮庵（別に良庵）、後に蔵

六、幼名は宗太郎（別に惣太郎）である。大村益次郎と名乗ったのは、慶応元年（一八六五）藩主の命令によってである。廟堂に仕官してからは、姓は藤原、諱を永敏と称した。代々医者の家である。祖父は村田良庵（別に良安）^{ながとし}、父は村田孝益、母は梅である。益次郎は兵部大輔となり、明治二年（一八六九）九月四日京都三条木屋町にある旅寓の二階で兇徒のために刺され、それがもとで敗血症となり、同年一月五日に永眠した。時に四十才であった。贈従二位を賜わり、その新しい日本の兵制改革の功労は史上に輝いている。

大村益次郎の早稲田大学図書館所蔵の伝記書を拾ってみると、以下のとおりである。

『故兵部大輔従二位大村永敏御事蹟年表並逸事談話』（小野榮治編、大村神社別格出張事務所刊、昭和9・11・1発行、ヌ六六〇）『大村兵部大輔』（足助直次郎著、金港堂刊、明治35・7・10発行、ヌ六七七）『幕末維新の兵制改革』（絲屋壽雄著、中央公論社刊、昭和46・7・15発行、中公新書257）『大村益次郎』（大村益次郎先生伝記刊行会編、摩書房刊、昭和19・4・1発行、ヌ六五五）『近代軍制の創始者 大村益次郎』（田中惣五郎著、千倉書房刊、昭和13・5・13発行、ヌ六五三）『大村益次郎写真集―目で見る益次郎の生涯―』（内田伸編、マツノ書店刊、昭和50・12・20発行、ヌ六七五）『大村益次郎文書』（内田伸編、マツノ書店刊、昭和52・3・10発行、ヌ六七六）『大村益次郎先生事蹟』（村田峰次郎著並発行者、大正8・11・30発行、ヌ六七三）『大村益次郎先生伝』（村田峰次郎著、稲垣道真発行、明治25・12・27発行、ヌ六七四）、同じ本が『渉外関係雑誌記事・

目録類』（リ四三三（望））の中にも入っている。

この曲は、サリバン作曲、喜歌劇『ミカド』の中で、日本の皇帝に対する礼式の曲としてつかわれたり、ブチーニの『お蝶夫人』にとり入れられて、諸外国に日本の国歌と思われてあやまって使われていたようである。

そして日本では、この歌は、軍歌になったり、流行歌にされたり、唱歌にさえたこともある。つまり近代歌謡の初まりである。前に述べたように、いろいろな意味で日本の歴史の数頁を物語るにふさわしい、様々な社会状況を含んでいる一つの歴史的資料なのである。

（追記）

この一文を書き終えてから次のものを見つけたので加えることにする。

『露国征伐新流行ぶし』（明治37・2発行、編集兼発行者鈴木与八、発行所大川硯吉、準特・チ二七七〇（ハ））の中の「トコトンヤレ節」（花の家談という序がある）

・皆さん／＼お艦のうしろで、まご／＼するのは何んぢやいなトコトンヤレトンヤレナ、アーレは降参するとの露西亜の兵卒知らないか、トコトンヤレトンヤレナ。

・皆さん／＼津軽の海峡うろ／＼するのは何んぢやいな、トコトンヤレトンヤレナ、アーレは空果狙ひの露西亜の軍艦知らないかトコトンヤレトンヤレナ。

・皆さん／＼仁川沖にて海戦あつたは何んじやいな、トコトンヤレトンヤレナ、アーレは露艦を砲撃なしたる日本の軍艦知らないかトコトンヤレトンヤレナ

・皆さん／＼旅順のあたりで大砲打つのは何んじやいな、トコトンヤレトンヤレナ、アーレは日本軍艦露艦を討つのを知らないかトコトンヤレトンヤレナ。

・皆さん／＼此度のいくさに沈んだ露艦は何んじやいな、トコトンヤレトンヤレナ、アーレはワリヤツク、コレ！ッ知らないかトコトンヤレトンヤレナ。

『露国征伐新いそぶし』（金竜山人著、明治37：2発行、編集兼発行者鈴木与八、発行所大川碓吉、チニロ（C））に「トコトンヤレ」として、前に上げた『露国征伐新流行ぶし』の最初の二節だけが載っており、次にそのすこし後に「宮さん／＼」として次の歌詞が載っている。

・皆さん／＼今度の戦争に献金するのは何んじやいな、アーレは遠征兵士の慰労のお金と知らないの、トコトンヤレトンヤレナ

・皆さん／＼敵軍の中にきら／＼光るは何んぢやいな、あれは味方の兵士が抜刀で進むを知らないか。

・海の荒いのに大砲の音の、ドン／＼鳴るのは何んじやいな、アーレは、露西亜艦沈没させたる日本の軍艦とは知らないか

とあり、これは日露戦争の時のもので勝ちいくさをこんな風に

「トコトンヤレぶし」について

庶民に知らせ、庶民はこれでいろいろなことを多分知らされたのであろう。